

『Me, My Mouth and I』観劇レポート

古門華子(早稲田大学文学部4年)

「作品を観て考えさせられた」だけでなく「自主的に考え行動する」社会へ

本作品は、トゥレット症を持つジェス・トムがベケットの戯曲『Not I』の「口」役として舞台に立つまでのドキュメンタリーである。恥ずかしながらベケットに関しては『ゴドーを待ちながら』で有名な不条理劇作家、という程度の知識しか持ち合わせていなかったが、作中で述べられている通りこの『Not I』も非常に難解なストーリーであった。話す役者は一人のみ、暗闇に浮かぶ「口」が早口で自身の半生だと思われる事柄について早口でまくしたてる。ただそれだけの作品にも関わらず、断片的にしかな理解することができない台詞の数々が次々と「口」から発せられるのだ。ジェスの言葉を借りるならば、『Not I』は「世界での居場所を見つけようとした女性が、自分の制御できない身体と口を用いて、排除された女性たちの声を取り戻そうとしている」物語であり、「観客の神経を揺さぶる」可能性を持つ作品である。

本作品のメインであるジェスは汚言症のあるトゥレット症を持つ、車いすユーザーの女性である。トゥレット症の特性から劇場の観客席を移動するよう要請された、つまり「観客になれず排除された」経験があるため、それ以降は「観客」としてではなくパフォーマーとして劇場に存在することを決めたそうだ。彼女は本作品の中で、同じ障がいを持つ友人やベケットの研究者、視覚障がいを持つ女性政治家など、多様な人と会話をして役作りを深めていく。そしてその中で「口」と自身の間にある共通点を見出していく。与えられた役に真摯に向き合い、多くの人から学びを吸収し、膨大な量の台詞を体に叩き込む彼女は、演劇に誠実な一人の役者以外の何者でもない。障がい者「なのに」頑張っていてすごい、などという感想は、マジョリティ側からの差別意識からしみ出たものである。トゥレット症をはじめとした障がいは「生きづらくて深刻、可哀そう」であるとか、「強みであり個性の一つ」などと単純にラベリングできるものではない。そもそも障がいを「障害」たらしめているのは、マジョリティに都合の良いように構成されている社会なのだ。作中でジェスは、障がい者かつ車いすユーザーでありコメディアンのリズ・カーと対談するにあたって、それぞれが大きなゴミ箱の中に入るという一風変わったスタイルを指定している。これは、彼女たち車いすユーザーが公共の場を移動する際にはたいていゴミ箱のある裏道を通ることになる、ということから着想を得ているそうだ。自分たちを想定外として扱う社会への批判であり痛烈な皮肉であるこの行動が観客、ひいてはマジョリティに向けられたものであるということをおぼろげに忘れてはならない。

人種やジェンダー、セクシュアリティなどにおけるマイノリティを題材とした作品

の感想として、よく「感動させられた」「考えさせられた」という文言を見聞きするし、筆者も使用したことがある。そのような感想を抱くこと自体は全く問題ないのだろうが、そこで思考停止してしまうのではもったいないように思う。「私たち」は、もう一歩先へ進むことができるのではないか。つまり、ただ作品から受動的に「考えさせられる」だけではなく、自らの持つ特権やマイノリティ性について自主的に考え、何らかの行動を起こすことができるのではないか、ということだ。この何らかの行動というのは、自ら情報を吸収・発信する、日常生活の中で意識する、など人によって様々だろう。しかし、ゴミ箱のある裏道を通らなければならないようなバリアを少しでもなくしていくためには、マジョリティ側がアクションを起こさず旧態依然としていては何も始まらないのではないだろうか。

本作品は『Not I』上演までのドキュメンタリーが主であるため、上演内容自体はほんの数分のダイジェストとなっている。もちろん、上演の「過程」である本作も、観客がエンパワーメントされるには十分な熱量であっただろう。しかし、本作品を観たからには『Not I』という作品自体も機会があれば是非観てみたいものだ。

講評 長島 確

(東京芸術祭副総合ディレクター／ファーム共同ディレクター／東京藝術大学音楽環境創造科特任教授)

古門さんのレポートを読み、この映像作品で紹介されているジェス・トムの活動、そのひとつひとつのアクションの効果と意味を、丹念に押さえて言語化しているのがとてもよいと思いました。私自身もこのドキュメンタリーを見て、最終的に完成する作品だけでなく、プロセスも含めた創作行為の一端が、社会に対するアクションであり、メッセージとなって、人に働きかけ、考えさせたり行動を促したりする可能性があるのだということを痛感させられました。またレポートの中で、マイノリティ側だけでなく、マジョリティ側がアクションを起こし変化していかなければいけないという指摘は非常に重要だと思いました。これはあらゆる差別に通じる課題です(話がやや逸れますが、『ホワイト・フラジリティ』という本があって、人種差別について、白人である著者が、マジョリティである自分たち白人の側の変化を非常に厳しく促す内容で勉強になります)。ジェスさんの作品、本編を生で見られる機会をいつか作れたらと思っています。